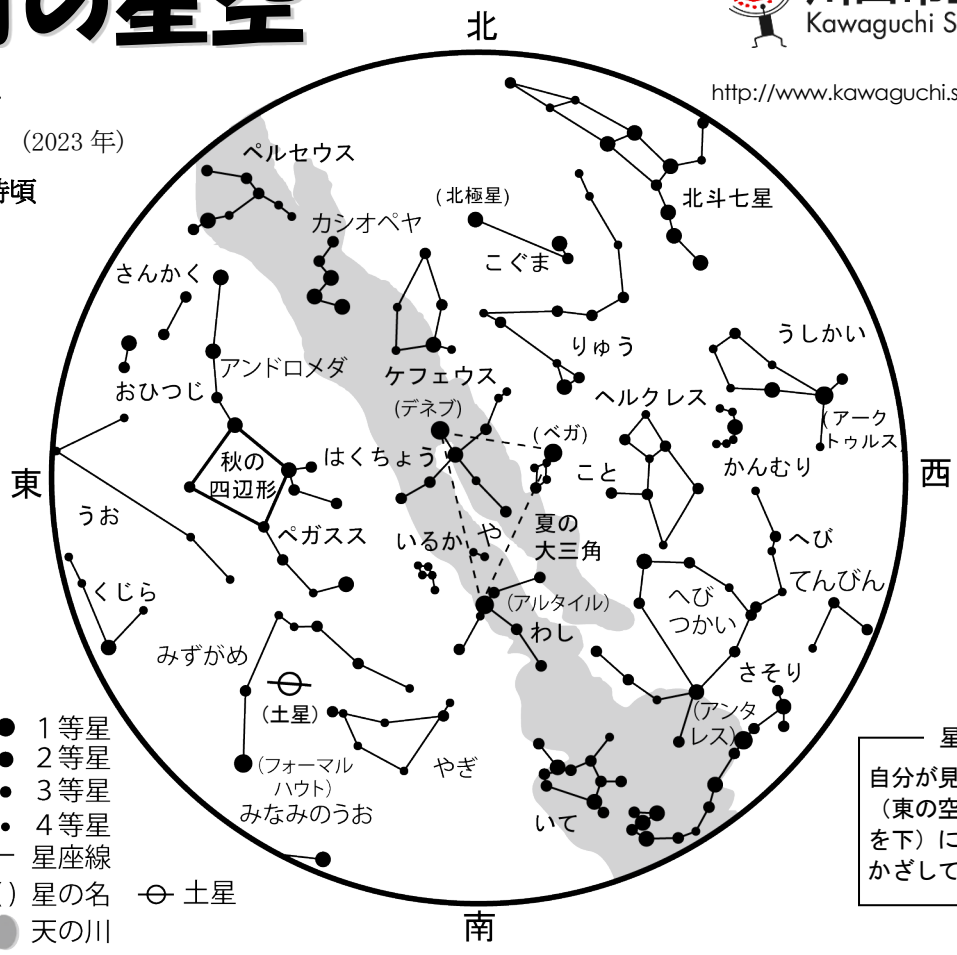
今月の星空

川口市立科学館
Kawaguchi Science Museum
tel 048(262)8431
http://www.kawaguchi.science.museum/

9 月 (2023 年)

中旬 20 時頃



星図の見方

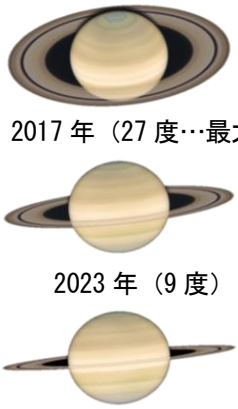
自分が見ている方角を下（東の空を見るときは東を下）にして、頭の上にかざして見ます。

月　　齢　◑ 下弦 7 日、● 新月 15 日、◐上弦 23 日、○ 満月 29 日

惑星情報　水星 日の出前 東（しし座 0→－1 等）※20 日以降　木星 真夜中 東→南東（おひつじ座 －3 等）
金星 日の出前 東（かに→しし座 －4→－5 等）　土星 夜のはじめ頃 南東（みずがめ座 1 等）

☆秋の星座とともに昇る土星と環の傾き

東の空からはペガスス座などの秋の星座が昇ってきました。星座探しの目印となるのは秋の四辺形。この 4 つの星は 2～3 等星のため、目立つ夏の大三角に比べると市街地では注意深く探す必要があります。この秋の四辺形が見えるようであれば、その周囲にある 2 等台の星を持つアンドロメダ座やカシオペヤ座へと秋の星座をたどることができます。さらに、フォーマルハウト（1 等）の上方に土星（1 等）が輝いています。これからの時期は夜の早い時間帯から高度も高くなり、望遠鏡でも観測しやすくなります。注目のひとつは環の傾きです。土星は、太陽から約 14 億キロメートルほど離れた（地球-太陽間の約 9.5 倍）ところを、自転軸が約 26.7 度傾いた状態で公転しています（地球は約 23.4 度）。そのため、地球から見ると年々環の傾きも変わっていきます。右図のとおり、環の傾きが最大であった 2017 年と比べると今年はだいぶ傾きが小さいことがわかります。2025 年には環を真横から見ることで環が見えなくなる「環の消失」が起こります。



※カッコ内は環の傾き（中央緯度）
©StellaNavigator/AstroArts
図 土星の環の傾きの変化

☆9 月後半は月を見よう～21 日 アンタレス食、29 日 中秋の名月～

15 日の新月を過ぎると日没後の早い時間帯から月を見ることができるようになります。新月から数えて 3 日目は三日月（17 日、日没時に西の低空）、9 日目は上弦（23 日、日没時にほぼ真南）が見られます。そして、15 日目（29 日）は旧暦 8 月 15 日にあたる「中秋の名月」で、「十五夜」とも呼ばれます。今年はちょうど満月となり、日没と共に東から昇り、一晩中、秋の夜空を照らします。

21 日は、上弦前の月が 1 等星のアンタレスを隠す「アンタレス食（星食）」が起こります。日本で見られる 1 等星（恒星）の星食は 2018 年のアルデバランとレグルスの食以来、5 年ぶりです。アンタレスが隠れ始める「潜入」は 17 時 26 分。日没（17:41）前で空が明るく観察は難しいですが、姿を現す「出現」は 18 時 51 分で、肉眼でも観察できるかもしれません。望遠鏡や双眼鏡を使う※と見やすいでしょう。

※観察する際は、誤って望遠鏡や双眼鏡で太陽を見ないように注意しましょう。